



名古屋城

子ども博士になろう



学習シート「城下町」編

名古屋の城下町は、どのようにつくられたのでしょうか

「清須越」と呼ばれる
町ぐるみの
引っ越しが始まりました



関ヶ原の戦いのあと、1610年(慶長15)、徳川家康は、西方への備えと東海道の守りかねて、水攻めや水害の心配がない台地で、熱田の港にも近く、東西に通じた名古屋に築城を開始しました。そして、城の普請と合わせて、これまで尾張国の中心だった清須から、町ごと名古屋へ移す「清須越」が始まりました。

「清須越」では、まず、築城関係者をはじめ武士、刀や鉄砲の職人が引っ越しを始め、寺社や町人ももとより、呉服商、米屋、塩屋、瓦屋などの商家、質屋までも新しい城下に移りました。さらには、橋まで引っ越しました。

「清須越」は名古屋城が完成した翌年に、ほぼ完了したといわれています。

「清須越」のあと、当時の臼挽き唄に「思いがけない名古屋ができて、花の清須は野となろう。」などと歌われました。



【清須から移された町】

本町、大津町、伊勢町、長者町、伝馬町、鍋屋町など

【清須から移された寺社】

総見寺、長栄寺、政秀寺、法華寺、含笑寺、朝日神社など

【清須から移された橋】

五条橋、伝馬橋

※現在、五条橋の擬宝珠が名古屋城総合事務所に所蔵されています。



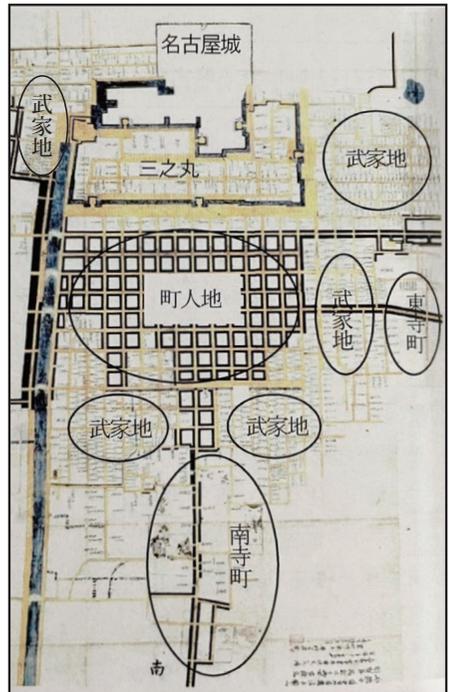
じょう かまち ぶ け ち
城下町は武家地・
 ちょうにん ち じしや ち
町人地・寺社地に
 わ
分けられました

じょう かまち ぶ け ち ちょうにん ち じしや
 城下町は、武家地、町人地、寺社
 ち みつ おお わ 分けられました。中で
 地の三つに大きくわ分けられました。中
 ちょうにん ち いっとう ち さんの
 も、町人地は、一等地ともいえる三之
 丸 みなみ はいち とうざい くかく なん
 丸の南に配置され、東西11区画、南
 ぼく くかく ごばん わ くぎ
 北9区画の「碁盤割り」に区切られまし
 た。名古屋の城下町の「碁盤割り」は、
 な ご や じょうかまち ごばん わ
 ひとつの区画の一边が約100メートルに
 さだ せいはうけい
 定められ、正方形になっていました。区
 かくない おお まち や た
 画内は、多くの町家が建てられるよう、
 まくち せま おく ゆ まち や
 間口を狭くして、奥行きのある町家が
 せつけい
 設計されました。

ぶ け ち み ぶん によって わ 分けられ、
 さんの まる なる せ け たげのこし け
 三之丸には成瀬家や竹腰家をはじめ、
 おわりはん じゅうしん や しき お
 尾張藩の重臣たちの屋敷が置かれまし
 しろ ひしがわ ちゅうきゅう い か ぶ
 た。さらに、城の東側に中級以下の武
 け ち せつてい しらかべちよう
 家地が設定されました。白壁町、
 ちからまち しゆもくちよう しろ ひがしもん つつ
 主税町、撞木町など、城の東門に続く
 とお りやがわ しろ ちか ほう こくだか
 通りの両側に、城の近い方から石高に
 わ ふ ごばん
 よって割り振られました。そして、「碁盤
 わ しゅうへん ちょうにん ち かこ
 割り」の周辺には、町人地を囲むよう
 やまぐち こばやし ひろい はぼした ち いき
 に山口、小林、広井、巾下などの地域
 ぶんざん ちゅうきゅう かきゅう ぶ し はいち
 に分散して中級・下級の武士が配置さ
 れました。

じしや ち しろ ぼうえい か じょうか
 寺社地は、城の防衛を兼ねて、城下

まち ひなみ ひがし お しゅう ぼ ごとにあつ
 町の南と東に置かれ、宗派ごとに集め
 られた じいん ふた てらまち
 寺院で二つの寺町がつくられまし
 た。一つは「南寺町」と呼ばれ、本町
 ひとり ひなみてらまち よ ほんまち
 通りに沿って じょうかまち ひなみ いぐちか
 城下町の南の入り口近くに、
 ばんしゅう じ そうけん じ ちゅうふく じ なな てら
 万松寺、総見寺、長福寺（七ツ寺）な
 ど、広い敷地を持った じいん のほか りん
 臨 ざいしゅう そうとうしゅう じょうどしゅう じいん あつ
 濟宗、曹洞宗、浄土宗の寺院が集めら
 れました。もう一か所は「東寺町」と呼
 おかざきかいどう そ じょうかまち とう
 ばれ、岡崎街道に沿った城下町の東
 なん いぐち ほつ け じ がんしゅう じ
 南の入り口あたりに、法華寺や含笑寺
 そうとうしゅう にちれんしゅう だい
 など、曹洞宗と日蓮宗をはじめとする大
 しょう じいん お
 小の寺院が置かれました。



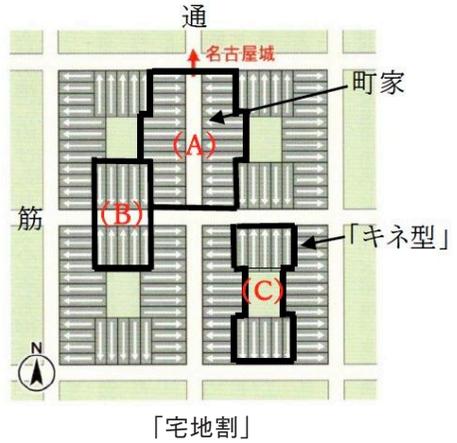
まんじねんかんごやえず きくせい
 「万治年間名古屋絵図」より作成

ひと くかく せいほうけい
一つの区画は正方形で、
 たくちわり がた
宅地割は「キネ型」に
なっていました



ちょうにんち ちゅうしんぶ くかく せいほう
 町人地の中心部は、1区画が正方形
 けい になっていて、すべての町家の出入
 り口が、通や筋に面して配置され、向か
 い合った町家で一つの町(A)(B)がつ
 くられていました。区画の真ん中にでき
 た空き地(C)は、寺社が置かれたり、
 きょううち つか たくち
 共有地として使われたりしました。宅地
 わり かたち きね に
 割は形が杵に似ていることから「キネ

がた よ
 型」と呼ばれています。また、真ん中の
 あち かいしょ いい なごや
 空き地は「会所」といい、名古屋では
 かんしよ よ
 「閑所」と呼んでいました。

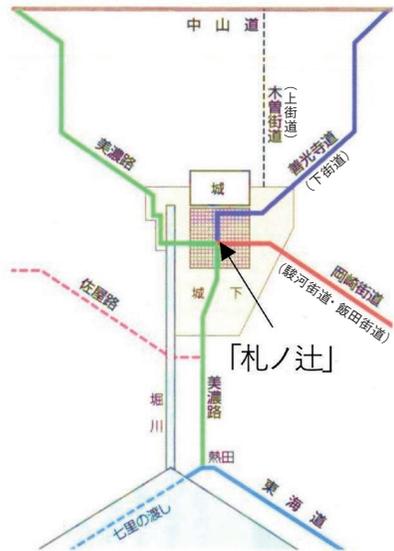


じょうかまち ちゅうしん ふだのつじ
城下町の中心「札ノ辻」から
 かいどう どうさいなんぼく
街道が東西南北に
 の
伸びていました



ほんまちどおり てん まちようすじ こうさ ばしよ
 本町通と伝馬町筋が交差する場所
 ふだのつじ よ
 は「札ノ辻」と呼ばれ、城下町の中心
 になっていました。また、ここは、南から
 せいほく む みの じ きた む
 西北に向かう「美濃路」、北に向かう
 き そ かいどう うわかいどう どうなん む
 「木曾街道(上街道)」、東南に向かう
 おかざきかいどう する が かいどう しいだ かいどう
 「岡崎街道(駿河街道・飯田街道)」な
 おも かいどう きてん
 ど、主な街道の起点にもなっていました。
 つじ せいなんかど てん まかいしょ にもつ はこ
 辻の西南角には伝馬会所(荷物を運
 ぶ人足や馬を用意する所)、西北角に
 ひ きやくかいしょ お
 は飛脚会所が置かれていました。また、

どうなんかど こうさつ ば もう ばく ふ
 東南角には高札場が設けられ、幕府や
 はん おきて か こうさつ もくせい た
 藩の掟などが書かれた高札(木製の立
 ふだ た
 て札)が立てられていました。



あたら ほりかわ ほ
新しく堀川が掘られ、
 すいじょう ゆ そう だいどうみやく
水上輸送の大動脈に
なりました



とくがわいえやす な ご や じょうちくじょう じょう か
 徳川家康は、名古屋城築城や城下
 まちぞうせい し ざいりょうばん ぐん じじょう
 町造成のための資材運搬、軍事上の
 ぼうぎょし せつ ふくしままさのり あつた
 防御施設として、福島正則に熱田の
 うみ あたら すいろ けんせつ めい
 海へつながる新しい水路の建設を命じ
 ました。工事は名古屋城の築城に合
 わせて行われ、新しい水路(堀川)は、
 しよみん あいだ ふくしままさのり かんめい さ えもん
 庶民の間で福島正則の官名「左衛門
 だい ふ だ ゆうほり よ
 大夫」から「太夫堀」と呼ばれました。
 かわ なが しろ な しがわ はばした ごもん ふ
 川の長さは、城の西側、巾下御門付
 きん あつた みなと ぜんちようやく
 近から熱田の港にいたる全長約6キロ
 メートルに及びました。当初、堀川には、
 ごじょうばし なかはし てんまぼし な やばし ひおき
 五条橋、中橋、伝馬橋、納屋橋、日置
 ばし ふるわりばし おとうぼし ななめい はし
 橋、古渡橋、尾頭橋の七つの橋がか
 けられ、「堀川七橋」と呼ばれました。
 ひ おきばし ふ きん ぶん か ねんかん
 日置橋付近では、文化年間(1804～
 18)のころともなると、南北数町にわ
 たって桜が植えられ、春は花見の名所
 としてにぎわいました。

きよすごし な やばし みなみ ひろい
 清須越のとき、納屋橋の南、広井
 とうがん ち ほん くら た
 東岸の地に藩の蔵がいくつも建てられ
 ました。さらに南に下ったところには、
 はん すいぐんし はいせん が し やしき おふな
 藩の水軍支配千賀氏の屋敷や御船
 かた やしき お あつた うみ
 方などの屋敷が置かれ、熱田の海に
 ちか か こう ふ きん ほんせん ようい
 近い河口付近には、藩船が用意され

ていました。

ちくじょうご ほりかわぞ すいりょう み の じ
 築城後は、堀川沿いに水運や美濃路
 りりょう こめ しお さけ ざいもく
 を利用する米、塩、みそ、酒、材木などを
 あつか しょうにん しょうにん あつ えど じだい つう
 扱う商人や職人が集まり、江戸時代を通
 な ご や しょうぎょう ちゅうしん
 じて名古屋の商業の中心になりました。



きょうほうじゅうよねんとりどしな ご や えす さくせい
 「享保十四年酉年名古屋絵図」より作成

※以上の6橋に尾頭橋を加え、
 「堀川七橋」と呼ばれた。